

軍隊 終戦 抑留の記

岡山県 土居 一 志

一 広島県瀬戸田町生まれ、昭和十一年三月瀬戸田町林尋常小学校卒業。家業は農業。六男一女の四男として生まれる。岡山県玉野市において昭和十一年四月より昭和十七年まで三井造船勤務。

二 昭和十七年十二月十日、本籍地の西部第二部隊に十七年現役徴集兵として入営。一週間して中支六八六四部隊に千六百名全員派遣された。藤部隊総人員三千人、馬千頭、宜昌付近の警備作戦に勤務。甲編成、第三十九師団は一部の残留を残して目的地に向かつて転出。日本防衛のためか。昭和二十年五月ころであった。

三 第三十九師団の中支から北支、満州に向けて何千里の行程は、ただ遠大な行軍と片づけられるようなものではなかった。完全軍装で一歩一歩大地を踏み

つけ、雨に打たれ風にさらされ、制空権を失った悲しさから夜行軍という苦難が続くこと約二カ月余。途中汽車を乗り継ぎ満州国海龍に着いたのは昭和二十年七月も終わりに近い真夏のさなかであった。この山中にソ連軍の侵攻を迎え撃つべく陣地構築にかかるという。「いよいよだな」、我々にもおぼろげながらも国の存亡の危機に直面していることはわかってきた。

四 昭和二十年八月十五日は、永遠に忘れることのできない戦争の終結の日であり、敗戦の日である。八月九日、日ソ開戦の布告された満州の全国境付近では、盛んに銃撃戦が行われている模様である。第一大隊は海龍付近に位置していたが、師団司令部の直轄として急いで四平街に転出した。八月十五日十二時、我が第一大隊は四平街を出発して、北東約二十キロ地点に陣地を構築することになった。ちようど重大詔勅放送のあったその時間で、行軍中に親日派らしい満人に泣きながら「日本は戦争に負けたんですよ」と聞かされたときには愕然としたが、そんな

ばかなことがあるか、ソ連の謀略放送であろうと問題にもせず行軍は続けられた。目的地に到着したが、直ちに明朝四平街に反転すべしの命令が出された。また小学校を宿舎にして待機した。そこで初めて無条件降伏した事実を知らされ、茫然自失の虚脱状態になり男泣きに泣いた。

敗戦ともなれば、この四平街にソ連軍が侵入するまでにと野戦倉庫、糧秣廠が開放され、被服、糧秣の放出が始められた。中支の我々には想像もできない多量の物資だった。毎日その受領には使役が出た。被服はすべて新品で、頭から爪の先まで体につけるものは各自の体力に任せて、いかなることに会っても何かの足しになるだろうとお互いに準備した。その中で、第四中隊は学校から邦人の経営する会社の倉庫に移動した。

五 四平街に入ってきたのはソ連兵だった。間もなく武装解除となった。三八式歩兵銃のご紋章を涙ながらに消した。残念であったことは今でも忘れられない。その前に軍隊手帳、貯金通帳、日誌等は全部焼

き捨てた。兵器はソ連に全部返納した。九月十六日、ソ連兵の監視の下に貨物列車に追い込まれるごとく乗せられた。貨車は分厚い板で二段に座があり、そこに詰められ行く先不明、西へ西へと走り、日本に帰るのは絶望だと思えた。

汽車は走っては止まり、また走って、山谷、白樺林や大草原を西へ走る。チタを過ぎ、バイカル湖を通りイルクーツクも過ぎた。どこまで行くのであるうか、シベリアの原野は既に冬枯れの様相になっていた。さらにノボシビルスク、オムスクも通り過ぎた。シベリアの旅はもう二十日以上も続いている。ペトロパブロフスクから列車は方向を変えて南下していった。ようやく下車したのは中央アジアのカラガンダであった。もう十一月半ばになっていた。

六 中央アジア・カラガンダは炭鉱の町であった。果てしない草原の中の収容所はバラック建てが並び、周囲は鉄条網とさくに囲まれ、四隅に見張りのやぐらが立っていた。ここまで我が第一大隊は建制のままでやってきたが、ここで既に先着の他の作業大隊

と合流した。日本人千八百人、ドイツ人二百人、計二千人で、これから炭鉱作業にかかる。三交代制の八時間労働で昼夜働かされるのだ。作業中隊は三つの組に再編され、それまでの中隊幹部はそれぞれの組の現場責任者となった。

前後するが、最初の夜、消灯して寝つく間もなく首筋を虫がはいまくっている。手でたたきつぶすと何とも嫌なにおいがした。次々と何匹でも出てくるので、たまりかねて電灯をつけて見た。黒い虫が無数にはい回り、寝台の柱や割れ目に逃げ隠れている。後で南京虫とわかった。被服にはシラミがくつついていて、それに南京虫ではたまったものではない。それでも疲労していたので眠ることができた。

七 ここで炭鉱労働について書いてみよう。作業服として紺の綿織物の服を一着支給された。作業に出るときは軍服の上にこの作業服を着て、防寒用の帽子、外套、靴といういでたちであった。各炭坑ごとに嚴重な人員チェックをされ、それぞれの作業場に出発していった。炭坑に着くと我々用の脱衣場で外套だ

けを脱ぎ、カンテラを受け取り入坑準備完了である。約十五名くらいが一組になり、ロシア人の監督に引率されて坑内に入っていた。この炭坑は地上から十五度くらいの傾斜で二千メートルくらいのところが採炭場であり、我々の作業場であった。仕事は、大きな重い柄の長いスコップで石炭を鉄板の積み込むのが仕事だった。

八 出炭の目標は厳しいものだった。不慣れた作業で言葉は通じず体力は衰えている。食糧は体力維持にさえ十分でなかった。出炭増強でノルマ制がしかれ、それが食糧配給量の差につながって悲惨さを増していった。この初年度の冬を越せずに栄養失調や病気で倒れて亡くなった戦友があった。痛ましい限りである。時に昭和二十一年三月二十日ころであった。

翌日になると、一日に何度となく所持品の検査が始められた。その異常ぶりは常識をはるかに超えたものであった。刃物類はもちろんのこと、書籍、印刷物、筆記具、さらに驚いたことは、ちり紙までもおよそ紙類と名のつくものはすべて没収された。被

服類も当座の必需品以外は没収されてしまった。何で無理してこの地まで持参してきたのであろうか。四平街を出発するとき何かの足しにはなるだろうと思っていたが、こうなってみればからしく残念で仕方がなかった。

バラックの中は、出入り口が中ほどに一カ所で中央に廊下があり、左右に上下二段式で木製の寝台が四人分一組でつくられていて、わら布団と枕にノコギリくずを入れて置いてあった。大切な小さいものはできるだけ枕及びわら布団に隠しておいたので、その分だけは検査を免れて助かった。身体検査は二カ月に一回。一級、二級は労働、三級は地上勤務、四級はOKで勤務なし、ソ連軍医が身体検査する。一日の労働時間は八時間、八時―十六時、十六時―二十四時、二十四時―八時の三交代勤務。食事は一日に三回。パン一食二百五十グラム、アワ一食飯盒の中盒一杯、スープ飯盒のふた一杯、砂糖スプーン(大)一杯。休日は一週間に一回(一時間ほどの使役)。衣類の交換、五月夏物、八月冬物(防寒帽 含

む)。賃金は二十三年春より三十人中十人くらいの人に支給がある。分配すると一人に対して十五ルーブルくらいであった。懲罰所は所内に一カ所あり、抑留者に味方をした幹部の人がときどき入っていた。零下三〇度、四〇度の寒さで苦労したことと思う。

それぞれの労苦がどのようなものであり、それをどうやって乗り越えたか。その一つは、隊員諸君がようやく仕事に慣れてきたこと、二つは、言葉が片言ながら少し相手に通じるようになったこと、三つは、これが大事なことであるが、ひたむきに増産に取り込むソ連側現場監督の気持ちが変わり、働く者同士の一体感が生まれてきたからではないかと思う。それはソ連のためでも収容所長のためでもない。どん底に生きる人間と人間の共感といたわりからおのずとわいてきたものである。空に浮かぶ白い雲、高く飛ぶ雁の群れに望郷の思いを寄せ、祖国日本に帰り着くのはいつの日か、その日が来るまでは生き続けようぜと互いに励まし合うのであった。

九 洗脳教育は、昭和二十二年五月より日本新聞発行、

輪読会、壁新聞、夜間の教育、生産者大会、その他
朝晩の作業出発・帰りに革命歌、反動分子のつるし
上げなど。

十 戦争ほどむだなことはない。消耗のみにて生産なし。彼我ともども、どれほどの血が流されたであろう。いわれなき抑留もなかつたであらうに。孫子いわく「兵ハ国ノ大事ニシテ、死生ノ地、存亡ノ道ナリ、察セザルベカラズ」とか。為政者たる者のよくよく肝に銘ずるべき言葉ではなからうか。

船は静かに岸壁に近づく。あれほど待ち焦がれた日本の土をもうすぐ踏むことができるのだ。「お帰りなさい、ご苦労さまでした」。棧橋で手を振り出迎えてくれる人々の声が何だか面映い。お互いに敗戦国民である。大手を振って出迎えられる身ではないのに、と濟まない気がする。米軍に占領された日本がどのように変わっているだろう、父母よ、兄弟よ、我が友よ、皆元気でいるだろうか、万感もごもの思いを秘め、一歩一歩タラップを降りる。あと三步、二歩、一歩。ついに踏むことができた故郷

の大地。舞鶴に上陸。やっと帰ってきたぞ、日本。これからどんな生活が待ち受けているやら。時、昭和二十四年十月三日、秋もようやく深まらんとするころ復員である。

苦汁をなめたエラブカの収容所

滋賀県 寺村 芳郎

昭和二十一年十月上旬、モスクワに近いタンポフという帝政時代の町で、電話線の埋設工事を約一カ月で終え、一息ついたとき突然出発命令。うわさは当然今度こそタモイ東京と流れ、半信半疑で上下二段の有蓋車に積み込まれ、お互い祖国に着いたら一番に口にするのは何だとか、米兵の占領状況はどうだろうかなど、空をつかむ話ばかり。やっと出発して二日目に駅でもないところで停車、しばらくすると全員下車の命、まだまされたか、ふんまんやる方なく、重い足取りで行軍について行く。二日目の夜は雨で皆濡れネズミ。